

3～8年(1832～1837)が著しい。しかし(4)に述べた事由のほか藩政の適切、住民の相互扶助なども加わって、奥羽地方のような惨状を呈することなく、特に宝暦の飢きん(1775)以後は奥羽地方の飢民が禁を犯して渡来する者が多く、これらの難民は西蝦夷地へ進出定住するようになった。なお漁獵の民であるアイヌの飢きんはやや特殊であって、前述のサケの不漁によるほか、例えば十勝川沿岸のアイヌは約5,000人であったものが、主食としていたシガが激減したため、某年(不詳)飢きんとなり、文化3年(1806)には300人余となった。

11. 大 雪

いわゆる大雪には冬季間の積雪が多いこと、ある特定の日に大雪が降ることが含まれるが、大部分の記録は前者である。一般には「大雪」、¹⁾「山のような大雪」という記事であるが、寛政10年1月(1798)は「積雪1丈余」と記されている。特定の日の大雪については、万治3年3月24日(1660V3)に山のような大雪が降り、明和6年4月5日(1769V10)に大ふぶきで伐木小屋の入夫が死んだなど、春になってからの大雪が被害を出している。大雪の被害は伐木小屋の被害既に述べた虻田牧場の馬の凍死のほか、明治12年1～2月(1879)に雨まじりの大雪が降り積雪表面が凍結したため、シガが雪の下のササなどを食うことができずほとんど全滅したほか、2,000頭以上の放牧馬が凍死したという惨害がある。

12. 少 雪

冬積雪がないのは気温が高いためか、降雪量が少ないためと考えられる。冬積雪がないという記録は世紀に4年あるが、享保3年(1718)だけは冬季の気温が高かったと記されている。寛政7年(1795)は食料が乏しく餓死者数名をだしたとあるが、その他の年については特別の記事は残っていない。

13. 霜 害

霜害は明治18年以降6回が記録されているが、明治33

年9月17日北海道中部以北に早霜があり、釧路などで農作物に被害があったほかはすべて晩霜である。晩霜害が起っている時期は6月中旬3回、下旬1回および7月上旬が1回であり、被害を受けた地域は旭川を中心とした内陸地方が多い。被害を受けた作物はバレイショ、カボチャなどであるが、フキ、ワラビなどの野草も枯死している。

14. 流 氷

北海道のオホーツク海沿岸は例年1月から3月までは流氷が接岸するので漁船は出漁できなくなる。しかし年によってはもっとおそくまで流氷が存在し、あるいは宗谷海峡から日本海へ、根室海峡から太平洋へ流れ出ることもある。明治8年3月(1875)は釧路・根室の海岸を1～2mの厚さの流氷が埋め、コンブに大被害を与えた。また明治25年4月2日(1892)には流氷が釧路港内に襲来し汽船2が沈没し死者をだした。このようなことは数十年来ないことだといわれているが、明治以前についての流氷の記録はない。

15. 山野火災

記録に残る最初の山野火災は前に述べた元禄8年4月(1695)の江差のヒノキ山の火災であり、山火事はこのほかに明治9年5月8日(1876)江差、明治32年5月19日(1899)利尻のものが、野火は慶応3年3月20日(1867IV23)の小樽付近のものがある。これら山野火災の時期はいずれも4～5月で、現在の山野火災の時期と一致している。

参 考 文 献

- 1) 日下部正雄: 史料からみた西日本の農業気象災害。農業気象, 15巻3号, 1960。
- 2) 日下部正雄: 19世紀末までの北海道災異誌。研究時報に発表の予定。
- 3) 日下部正雄: 史料からみた西日本の気象災害, 天気, 7巻1号。

【新書紹介】

四季の気象

大阪管区気象台長 大谷 東平著
理 学 博 士

新書版 103頁 啓林館発行 定価85円

気象の話題を季節別にたくみに書きこなしたこの書は単なる気象解説書ではない。その行間からは半生を防災業務に捧げた著者の主張、教訓、生活態度が気色ばらずににじみでている。しかし文体は読みやすく、内容は平易である。多分新制中学程度の素養で充分読みこなせるものであろう。

全般に筆者の造詣はユーモラスな文調とよく調和しているので、全く肩ばらずに楽しく日本をめぐる四季をききとることができる。とくに「都市の気温」「危険半円」「気温と心理作用」「日本の湿度」「かまいたち」「しぐれ」などはこの道の専門家に対しても或る意味で指導性を含んでいる。しかし、中には内容を平易にする余り、捕えた問題の複雑さにくらべ説明の不十分な点が見受けられるが、この書の性格からいって避けられなかった事であろう。

とにかく、この書は読みやすく、楽しく、美しいムードを持っている。広く一般におすすめしたい。